

学校保健実習を通して保健師学生が得た学び

金屋 佑子

了徳寺大学・健康科学部看護学科

要旨

本研究の目的は、2日間の学校保健実習を通して学士課程の保健師学生が得た学びの内容および実習施設（小学校または中学校）による学びの量の違いを明らかにすることである。4年次学生35名の課題レポートを質的帰納的に分析した結果、【学校保健活動の基盤】【養護教諭の役割と具体的な活動】【学校保健活動における連携の実際とその意義】【看護職としての気づき】の4つのカテゴリーが抽出された。次に得られた学びの数を実習施設別に量的に分析した結果、それらの違いは学びには影響しないことが示唆された。今後は本研究で得られた学びの妥当性や実習目標の妥当性、評価の視点等について討議していく必要がある。

キーワード:学校保健, 実習, 保健師選択制, 学びの内容

Students' learning outcomes from school health practice

Yuko Kanaya

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

Abstract

The purpose of this study was to clarify learning outcomes, which undergraduate students gained from two-day school health practice and the difference by facilities (elementary schools or junior high schools). As a result of qualitative analysis of 35 practice reports by fourth-year students, four categories were observed: foundation of school health activity, roles and activities of school nurse, actual cooperation in school health and its meaning and realization as a nurse. Second, we found no significance in the number of learning outcomes by the difference of facilities by quantitative analysis. In the future, it will be necessary to discuss the validity of these learnings, the validity of the practice targets and the evaluation framework.

Keywords: school health, practice, public health nurse elective course, learning outcomes

I. はじめに

日本の保健師教育においては、平成21年の保健師助産師看護師法改正による修業年数の延長、平成23年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正による単位数の見直しなど様々な変化が起こっている。同改正時には「学校保健や産業保健における組織への支援を明確化する」観点の必要性が挙げられ¹⁾、また看護師等養成所の運営に関する指導要領の改正では、「保健師活動の全体像を捉えることができるよう多様な場で実習を行うこと」²⁾が求められている。一方で、公衆衛生看護学実習において学校保健・産業保健実習は必須ではないため全ての保健師を志す学生が体験しているとは限らず³⁾、また実施している場

合も様々な実習施設・日数・形態が混在している状況である。

了徳寺大学（以下、本学）では、保健師免許を持つ者はそれを基礎資格として養護教諭二種免許状を取得し得ることから、学生が学校保健の臨地実習（以下、実習）を通して活きた学びを得ておくことは必要と考え、保健師養成課程履修学生（以下、学生）の全員が4年次に実習を履修する。平成23年度の保健師選択制開始以降、同様に実習を展開してきたことから、現在の実習を通して学生がどのような学びを得ているのかを概観する必要がある。また本学の実習は小学校と中学校に分かれて行っていることから、実習施設の違いによる学生の学びを比較し、今後の実習のあり方を検討することも必要である。なお公衆衛生看護学実習による学生の学びに関する先行研究は多いものの、保健センター等行政領域での実習に比べて学校保健領域に関する研究は少ない^{4) 5) 6) 7)}。実習による学びに関する知見を蓄積する意味でも、本学における学校保健実習を通して学生が得た学びの内容および実習施設による学びの違いを明らかにすることを目的とする。

II. 学校保健に関する教育課程および実習の概要

本学では2年次後期終了後に最大40名を保健師養成課程に選抜し、3年次より保健師養成に必要な選択科目の履修を開始する。学校保健については2～3年次に養護教諭二種免許状取得を前提とした講義・学内演習を行った上で、4年次前期に臨地実習を行う。公衆衛生看護学実習は実習Ⅰ（臨地:保健所4日、市町村6～7日）および実習Ⅱ（臨地:学校2日、産業3日）から成る。学生3～4名を1グループとする学校保健実習では「学校における児童・生徒および教職員の健康管理の実際を通して、学校保健の機能および地域との連携について学ぶ」ことを目的に、養護教諭の活動の観察・見学や、児童生徒等と共に教室で1日を過ごす等、学校生活に密着しながら学校保健活動を学ぶことを意図している。実習施設の選定にはA市教育委員会の協力を得て、同一市内の小・中学校で実習を展開する。

III. 研究方法

1. 分析対象

2017年5月から同年6月に、小学校7校、中学校3校の計10校に分かれて実習Ⅱ（学校保健）を履修した36名のうち、研究協力への同意が得られた35名の課題レポートを分析対象とした。課題レポートは各学生が実習を通して得た学びをA4一枚にまとめ、実習終了後に提出したものである。

2. 調査期間

2017年10月～2017年12月

3. 分析方法

本研究ではまず、文脈を重視しかつ構造的に学生の学びを明らかにするため、Krippendorf, K. の内容分析法^{8) 9)}を参考に以下の分析を行った。課題レポートを熟読し、「学校保健実習を通して学生が得た学びの内容」に該当する1文章あるいは関連文章を1単位として抽出しそれをコードとした。それらの意味内容の類似性、相違性に基づき集約、分類しサブカテゴリーとした。さらにサブカテゴリーの類似性と相違性に従ってカテゴリーを生成した。次に、得られた学びの数が実習施設（小学校、中学校）により異

なるかどうかを量的に分析するため、一人の学生から抽出されたコードの平均数を実習施設別に算出した。実習施設による差を検定するためにWilcoxonの順位和検定を行った。統計処理にはIBM SPSS Statistics ver. 19を用い、有意確率は5%未満とした。

4. 倫理的配慮

対象者に対し、研究の目的および方法、氏名および実習施設の匿名化、参加・不参加の自由、成績評価に影響しないこと、研究結果の発表などについて書面および口頭にて説明し研究協力への同意を得た。また本研究は了徳寺大学生命倫理委員会の承認を得た。

IV. 結果

1. 学生が得た学びの内容 (表1)

学生の学びを質的帰納的に分析した結果、19のサブカテゴリー、4つのカテゴリーを抽出した。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>、代表的なコードを「」で示す。

- 1) 52件のコードから3つのサブカテゴリー:<学校における養護教諭・学校保健活動の位置づけ><法律等に基づく学校保健計画の立案と遂行><地域特性や学校の保健課題に応じた活動>を抽出し、これらから【学校保健活動の基盤】を作成した。学生は「学校は教育の場であり、学校保健活動も教育活動の一環である」という基本を学び、また公衆衛生看護活動の基盤である法律についても記述することができていた。
- 2) 170件のコードから11のサブカテゴリー:<保健室運営の計画と実施><安全で衛生的な環境づくり><児童生徒等のセルフケア能力を育む活動><養護教諭や保健室の姿勢・あり方><発達段階に応じた関わり><様々な場面・手段を活かした予防活動><より医療的知識が必要な場面での活動><教職員への知識の普及や体制づくり><時代の変化に対応した活動の必要性><家族を単位とした働きかけ><教職員への健康支援>を抽出し、これらから【養護教諭の役割と具体的な活動】を作成した。学生は対人支援のみならず、その周囲の環境や組織も含めた支援が行われていることを理解した上で、直接的または間接的な様々な活動の実際を学びとっていた。加えて家族や教職員への支援も重要であることを理解できていた。
- 3) 76件のコードから4つのサブカテゴリー:<学校内教職員との連携><学校内専門職との連携><地域の専門職、ボランティアとの連携><学校、家庭、地域が一丸となった学校保健活動>を抽出し、これらから【学校保健活動における連携の実際とその意義】を作成した。対象者またその周囲の環境を支援するにあたって、養護教諭が様々な関係者等と連携し協力しあうことの必要性とその意義を学びとっていた。
- 4) 2件のコードから1つのサブカテゴリー:<他の看護場面との共通点>を抽出し、これを【看護職としての気づき】とした。学生は実習前に得ていた学びを、実習で新たに得た学びと比較し、それらを看護の領域を問わない共通の事柄として理解していた。

2. 実習施設による学生の学びの違いの有無 (表2)

35名の学生のうち、小学校で実習した者が25名(71.4%)、中学校で実習した者が10名(28.6%)であった。学生一人あたりの抽出されたコード数は最小5件～最大16件、平均してそれぞれ 8.7 ± 2.5 件、 8.5 ± 1.5 件であり、得られたコード数に実習施設の違いによる有意な差はみられなかった。

表1. 学校保健実習を通して学生が得た学びの内容 ※ () 内はコード数

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード(学生が得た学びの内容)
学校保健活動の基盤(52)	学校における養護教諭・学校保健活動の位置づけ(10)	学校は教育の場であり、学校保健活動は教育活動の一環である 養護教諭は健康・保健の知識を持つ教育者として活動している
	法律等に基づく学校保健計画の立案と遂行(18)	学校保健安全法に基づき、学校全体で学校保健活動が展開されている 養護教諭は学校保健計画を立案し、その詳細な調整・運営に携わる
	地域特性や学校の保健課題に応じた活動(24)	学校がある市の特徴・地域の特性を意識した活動 健康に関するデータを分析・比較し学校の特徴・健康課題を明らかにする
	保健室運営の計画と実施(23)	保健室における、けがをした児童生徒への救急処置や健康相談 健診の日程調整、会場設営、書類作成等の具体的な作業
	安全で衛生的な環境づくり(16)	校内巡視は感染症対策の機会でも、児童生徒を観察できる機会でもある 安全で衛生的な環境かを評価し、環境面から学校教育を支援していた
	児童生徒のセルフケア能力を育む活動(31)	安全で健康な生活に関する知識や意識の向上を、早期から目指す 自己と他者の健康に関心を持たせ、学校全体のセルフケア能力を向上する
	養護教諭や保健室の姿勢・あり方(14)	保健室は相談できる・落ち着く場、安心する空間等様々な機能を果たす 養護教諭は児童生徒と真剣に向き合い、冷静で温かい姿勢であった
養護教諭の役割と具体的な活動(170)	発達段階に応じた関わり(12)	年齢や健康状態、様々な発達段階に合わせた働きかけをする 発達段階に応じたアプローチが必要である
	様々な場面・手段を活かした予防活動(11)	児童生徒の顔色や声色から、いつもと違う点をさり気なく感じ取っていた 保健だより等を使い、予防的に取り組みをしていた
	より医療的知識が必要な場面での活動(19)	健康問題がある児童生徒と家族、またその周囲の児童生徒への支援 感染症、食中毒などの健康危機管理の予防・拡大防止に取り組む
	教職員への知識の普及や体制づくり(9)	緊急時や感染症・食中毒発生時等、全職員に必要な知識を普及する マニュアルの作成、速やかな連絡など、救急体制が徹底されていた
	時代の変化に対応した活動の必要性(5)	少子化、核家族化等の時代背景や、現代の問題の多様性を理解できた 時代の推移による潜在的な問題に対する予防的取組も必要である
	家族を単位とした働きかけ(14)	児童生徒の家族背景についても理解し、家族単位で働きかけていた 保護者からの情報共有や相談もあり、家族への支援も行っている
	教職員への健康支援(16)	養護教諭は教職員の話も傾聴し、心身の健康を支援する 普段の様子や健診結果から教職員を観察し、予防や早期発見につなげる
学校保健活動における連携の実際とその意義(76)	学校内教職員との連携(28)	校長、保健主事、担任等との情報共有および連携 担任や他の教職員と情報共有し、児童生徒を継続して観察する
	学校内専門職との連携(22)	学校医、学校薬剤師、学校歯科医、カウンセラー等との連携 他職種と連携し組織的に学校保健活動を行っている
	地域の専門職、ボランティアとの連携(12)	警察、教育委員会、助産師、市役所、保健所など地域の専門職との連携 地域のボランティアとは食事・食育に関する連携をしていた
	学校、家庭、地域が一丸となった学校保健活動(14)	保健室での様子、学習状況、生活の状況等、組織で多角的に児童生徒を捉える 様々な連携により学校、家庭、地域の全体で教育・学校保健活動を行う
看護職としての気づき(2)	他の看護場面との共通点(2)	多角的に情報収集し活用する力ほどの看護職にも必要だと感じた チームで対象者と向き合い働きかける点は、病院でも学校でも同じである

表2. 実習施設別にみた学びのコード数

実習施設	実習人数 n (%)	総コード数 n (%)	一人あたりのコード数 (平均±SD)
小学校	25 (71.4)	218 (71.9)	8.7±2.5
中学校	10 (28.6)	85 (28.1)	8.5±1.5
合計	35 (100.0)	303 (100.0)	8.7±2.3

※Wilcoxonの順位和検定

V. 考察

1. 実習を通して学生が得た学びと実習施設の違いによる影響

本学における2日間の実習を通して学生が得た学びを質的帰納的に分析した結果、学生は幅広く多くの学びを得ており、本学の実習目的を達成できていた。中でも最も大きなカテゴリーは【養護教諭の役割と具体的な活動】で、そのうち<セルフケア能力を育む活動><保健室運営の実際>が多かった。学生は主に保健室で養護教諭が児童生徒と関わる場面から、セルフケア能力を育む関わりを学んでいたと考えられる。児童生徒は自らの心身の健康を保持増進する能力を身に付けていく発達段階にあることから、学生は学校保健活動の特徴的な学びを得ることができていた。また近年、教員の健康問題も注目される中で^{10) 11)}、<教職員への健康支援>や「時代の推移による潜在的な問題に対する予防的取組」の必要性という幅広い視野でも学びを得られていたと考える。

次に大きなカテゴリーは【学校保健活動における連携の実際とその意義】で、これを構成するコード数の割合は先行研究^{12) 13)}に比べてやや多かった。その背景として、特に近年、学校・家庭・地域等の連携がより重要になってきていることや、県・市が従来より連携の強化を推進してきたことが関係していた可能性がある。学生は肌で学校保健に携わる教職員等の一体感を感じ、またそのことから「チームで対象者に働きかける点は病院でも学校でも同じ」という共通性に気が付いていた。また学生は小・中学校で自分自身が学校保健活動を楽しんでいたが、当時はそうした認識がなく、本実習によって経験を振り返り意味づけする機会になっていた。その中で様々な連携があることを学び、自分自身の成長に多くの職種が関わり支えられていたことにも気付くきっかけになっていたと考える。

【学校保健活動の基盤】では<地域特性や学校の保健課題に応じた活動>に関する学びが最も多く、また法的根拠についても記述できていた。これらは学生が公衆衛生看護学を学び、地域診断とその重要性や、活動根拠の重要性を学んできたことが影響していたと考える。学生にとって、学校保健実習での気づきを他の公衆衛生看護学の枠組みと同様に捉えることは自然であり、アイデンティティが「教育」である養護教諭¹⁴⁾・教職員等から得た学びを、「看護」の視点でも捉えられていた。このことから、公衆衛生看護学実習の一貫で学校保健実習を行うことは、学生の視野の広がりや深まりの醸成に寄与すると考える。

こうした学生の学びの量に対して、小学校または中学校という実習施設の違いは影響しておらず、いずれでも同程度の学びが得られることが示唆された。先行研究でも同様の結果である^{12) 13)}ことから、学校保健の現場で実習することの意義は実習施設に関わらず大きいといえよう。したがって本学で行ってきた臨地2日間の実習は、全ての学生が同様に学びを得る機会となっており、今後も同様の枠組みで進めることは妥当であると考ええる。

2. 学校保健実習の充実にむけた今後の方向性

これまでの実習も本学の実習のねらいを達成できるものであったが、今後はさらに実習目的・目標の妥当性、評価の視点等についての検討が必要である。実習の実施も含めて各養成機関が試行錯誤している現状においては、これから蓄積されていく知見と比較しながらそれらを明らかにしていくことが課題である。また本研究は公衆衛生看護学的観点で学生の学びを捉えているため、今後は学校保健専門職とも協力し、学びの内容の妥当性や実習上の工夫等について討議することも必要である。その際には単年度のみならず経年的に振り返りを行うとともに、形態素解析等も含めた多角的な分析に基づいて充実を図ることが重要であると考ええる。

謝辞

学生を指導いただいた小・中学校の皆様、教育委員会の皆様、実習および研究に協力いただいた教員、学生の皆様に心より感謝いたします。

VI. 文献

- 1) 文部科学省: 保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部を改正する省令の公布について, 文部科学省ホームページ, http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kango/1305957.htm (2017. 11. 29 17:00アクセス)
- 2) 文部科学省: 看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン, 文部科学省ホームページ, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2016/11/15/1379378_04.pdf (2017.11.29 17:00アクセス)
- 3) 全国保健師教育機関協議会: 指定規則の改正に伴う新教育課程および実習に関する緊急調査結果報, 全国保健師教育機関協議会ホームページ, <http://www.zenhokyo.jp/work/doc/%EF%BD%8825-iinkai-shourai-201308.pdf> (2017. 11. 29 17:00アクセス)
- 4) 斉藤恵美子, 鈴木良美, 澤井美奈子ほか (2017) 保健師教育課程選択制導入前後の保健師による学生実習の技術到達度評価の比較. 日本公衆衛生看護学会誌. Vol.6 No.2, 150-158.
- 5) 久保善子, 嶋澤順子, 高橋郁子ほか (2013) 行政・産業・学校保健実習での学生の学びの特徴. 慈恵医大誌. 128巻, 109-119.
- 6) 平澤則子, 飯吉令枝, 井上智代ほか (2017) 公衆衛生看護学実習における学生の継続訪問実習の学び. 日本地域看護学会誌. 20巻2号, 73-79.
- 7) 矢庭さゆり, 金山時恵, 藤田彩見 (2016) ミニマム・リクワイアメンツ全国保健師教育機関協議会版 (2014) から捉えたA大学看護学部の保健師教育における課題 (第1報). 新見公立大学紀要. 37巻, 145-153.
- 8) Krippendorf, K., 三上俊治, 椎野信雄ほか訳 (1989) メッセージ分析の技法-「内容分析」への招待. 勁草書房, 東京.
- 9) 舟島なをみ (2007) 質的研究への挑戦 第2版, 医学書院, 東京.
- 10) Akihiro N, Shinichi I, Masaru K et al (2016) Relationship between depressive symptoms and perceived individual level occupational stress among Japanese school teachers. *Industrial Health*. Vol54, 396-402.
- 11) Marino N, Akiko H, Kimiyo K (2015) Effects of long-time commuting and long-hour working on lifestyle and mental health among school teachers in Tokyo, Japan. *Journal of Human Ergology*. Vol44, 1-9.
- 12) 綾部明江, 鶴見三代子, 長澤ゆかりほか (2014) 学校保健実習を履修した学生の学び. 茨城県立医療大学紀要. 19巻, 109-116.
- 13) 金山時恵 (2007) 保健師教育課程における学校保健室実習の学びと今後の課題. 新見公立短期大学紀要. 第28巻, 77-86.
- 14) 山本洋瑚 (2014) 養護から教育の視点へ: ある養護教諭の実践を通して. 看護学統合研究. 15 (2), 1-15.